映画談義

1 「SHERLOCK/シャーロック 忌まわしき花嫁」

監督　ダグラス・マッキノン
主演　ベネディクト・カンバーバッチ、マーティン・フリーマン

S：こんばんは

感想と言われても困るのですが、この後はネタが入るので、見た後にしてください。その方がいいですよ。映画ファンなら…

私はホームズのことは全く知らないし、テレビ版も知らないので、はっきり言って感想らしきものは言えませんが、きっとテレビ版のファンなら楽しいと思いますよ。日本でいえば相棒シリーズや事件は現場で起きてるシリーズのように、劇場でスリル満点に楽しめると思います。ただ最初のシーンで今回、なぜ舞台を昔にしたのかや、いろいろなホームズファンが喜びそうなネタ晴らしをしてるのかはあまり好きではなかったな。どくろの絵が

実はよく見ると夫人の姿が映りこんでいたりというのは、きっとファンならわかるのでは、それを前もってネタ晴らししなくてもいいんじゃないと思いました。

私なぞは全く知らないのでどこまでが小説と同じでどこが創作なのか区別もつかないし、推理小説ファンでもないので、ホームズ流もわかりません。それともホームズ像は全く小説とは違うのかな。私としては推理ファンのつもりで見ていましたが、ちょっと話が飛びすぎてわかりにくかったです。特に過去と現在が頻繁に出てきて、マトリクスのようにつながっているようなんだけど、なんで飛ぶのかがよくわからなかった。それとも彼は麻薬中毒でこれはすべて夢なの。ま、私の映画の性向はよくわかっているだろうからあれですけど、いかにも現代的だわね。早いカメラ回しで見るものを、その世界に引き込んでいくその妙は十分に楽しめましたよ。じっくりと腰を据えるというよりは、見終わったら次回作を楽しみにする作品だと思います。決して悪い意味ではなく今の時代がそうなんだから、娯楽とはそういうものなんだから、今も昔も。そう意味でウエルメイドな作品ですね。現代に私の目を向かわせてくれた事に感謝します。ありがとう。

T：無駄にならずに良かったという思いです。ありがとうございました。

まず、名探偵ホームズについて言えば、私は小学校の図書館で「緋色の研究」や「バスカーヴィル家の犬」などシリーズものを全巻読みきっていますので、感慨については違うということですね。でも、その上で全く予備知識が無い人が見ても充分に面白さは堪能できると思います。日本の刑事ドラマ（「相棒」や「踊る大走査線」

ですよね）を引き合いに出されていますが、これは見込み違いかと思われます。

いわゆるこの手の刑事ドラマというのは群像劇の範疇に入ります。コナン・ドイルのホームズやアガサ・クリスティー原作ポアロなどのミステリーとは基本的に別物と思って下さい。

それにこの映画（というかＢＢＣ製作のテレビドラマのパイロット版）は、本国英国で本年一月に特別版として放映されたテレビ用のドラマで、最初の楽屋落ちのくだりと最後のインタビュー集については、本編の言わばおまけみたいなものです。（ＤＶＤパッケージに入っているボーナストラックとかね）

そもそも、このテレビシリーズというのは、現代版のシャーロックホームズの物語で、映画に登場する十九世紀の主人公とは仰られる通り、彼の幻覚の産物としか言いようがない訳です。（しかしこれも諸説あって、実はこのテレビシリーズ自体が十九世紀のホームズによる幻覚ではないかとか言われているみたいです）

小説の中のホームズも、自らの推理を実証するメソッドとしてドラッグを服用していたみたいですし、実際にこの映画の前日談で飛行機に乗ってオーバードーズをおこしてしまうホームズは、物語中で何度か死んだことになっています。そして、宿敵のジム・モリアーティーは、ホームズに倒された後にもラスプーチンばりの神通力で、ホームズを苦しめていますし、四クールもやっているテレビドラマともなると、あの手この手で奇想天外な物語を紡ぎ出してくるのですね。

映画の「シャーロックホームズ」ではガイ・リッチー監督がマッチョなホームズ＆ワトソンを登場させていました（「アイアンマン」のロバート・ダウニー・ＪＲとジュード・ロウのコンビ）けど、ギネスに登録されるほどの

マルチキャラクターとして、これからも 映画や舞台、テレビドラマなどで活躍していくことは間違いないでしょう。

この春からＮＨＫで新シリーズを放映する予定なので、機会があれば是非見てください。

それでは、また。

2 「二重生活」

監督　岸善幸

主演　門脇麦、長谷川博己、菅田将暉

S：感想といっても奥がましですが、よかったです。なぜかというと一つは私は人を見つめる映画が好きなのと二つ目はやたらと殺す殺されると叫びどぎつく描くのには嫌悪感があるからです。例えば私はたまたま友達との待ち合わせでクリーピーを見ることになったのですが黒沢清のスリラーとはと見たのですが、香川さんの狂人ぶりはそれなりに面白かったですが現代人の持つ不安には入り切れてないと思うのです。そんなこと問題にしてないといわれればおしまいですがね。それと比べれば現代人の不安を原作があるとはいえ、映像としても音楽とし

ても演技としてもよかったと思います。不安の追及克服という点では不十分なところもあるような。ただ私には現代哲学での解明については知識もないのですが。あのゴミ置き場のモノクロその一方性、尾行の一方性、パソコンでお乳を拡大させる一方性、教授が母親のために仕組んだ芝居の一方性。それに対し彼女の寝顔を彼が鉛筆で書き、それを見た彼女の顔そこにヒントがあるのではと思わせるさばきはよかった気がします。原作は読んでませんがね。

ただ教授を死なせなくてもと。原作がそうなのか知りませんが。教授の死でさらに彼女の人生を浮かび上がらせようとしているのかな。帰ってから見たビングクロスビーの喝采でグレースが彼女を好きになるホールデンの腕を離れてクロスビーに駆け寄るのを見て教授もあの女性に愛の告白をしてもと思ってしまったのは私の感情移入の強すぎかな。心は孤独な狩人もよかったな。あまり話が飛んでしまってもと思うので以上。

T：感想ありがとうございました。

原作を読んで思うことは、まずラストが違うということ。石坂夫婦の不和は原作同様元さやに納まりますが、珠は卓也と破局はせず、篠原教授も自殺（映画では未遂に終わりましたよ…。エンディングで珠が渋谷のスクランブル交差点で振り返った時に、尾行者として下半身が写りこみますが、それが彼）はしません。それどころか篠原教授のマザコン偽装夫婦のくだりは映画のみの脚色ですね。

それでも、この映画の放つ魅力というのは、人間の関係の深さを「尾行」という距離感で表現したということ

でしょうね。映画のモティーフにもなっているソフィー・カルは曖昧で極端な人間の記憶や認識と、一方で複雑な現実がズレていることを、皮肉とノスタルジアを持って指摘する女流作家です。原作者の小池真理子さんは「全く知らない人間が抱えている秘密を知ることで、ある共犯者意識が芽生える。それが、本人の実存を満足させる」といってますが、これは間違いなくソフィー・カルの影響でしょう。

ともあれ、人間の関係性を多面的に考察している、非常に哲学的なモノガタリであるということは言えると思います。

ついでに、最近観た「葛城事件」という映画も私の触手を動かした映画です。池田小学校の殺傷事件をモデルにしたフィクションです。死刑囚を生み出した家庭を、まるで堕ちたマイホームの手本のように描いています。（「クリーピー」よりも何倍か怖いですよ…。）機会があったら是非見て下さい。

それでは、また。

3　「インフェルノ」

監督　ロン・ハワード、フェシリティ・ジョーンズ

S：インフェルノ楽しく見させていただきました。ありがとうございます。ネタばれになるので、見てから読んでください。

ちょうどテレビで前作をやってたので、それを見ると、感想としては前作の方が私は好きです。何を映画に求めるかで違ってしまいますが、謎解き　宗教的建築美巡り　サスペンスという視点で見るのがいいのかなと思うと、建築の伽藍で床で、中段の廊下で彼らを探し、屋根裏で逃げようとする二人その辺のハラハラ感はよかったですね。まさにヒッチコックの世界を彷彿させますね。でも謎解きになると前作の方がよかったと思います。その最大の理由は記憶喪失にさせてフラッシュバックの乱用で恐怖を盛り上げようとしている点です。今アメリカ映画はこのカットを細切れにしてまさにサブミナル効果的に恐怖とサスペンスを盛り上げる方向に進んでいるのですね。前作ではそれほどでなかったのに。ヒッチコックの時代とは違うといえばそれまでですが。彼の場合はイギリス人でありながらむしろアメリカ的風景　広大なトウモロコシ畑や自由の女神や三大統領の巨大顔面での追っかけ等でハラハラドキドキの追っかけを演出しました。私は日本人だからどちらでも楽しく見せられましたがアメリカ人はヨーロッパへの劣等意識が強すぎるのではと思います。ちょっと前のケーブルテレビでヨーロッパからの監督がインデアンの横穴墳墓での盗掘落盤で一攫千金をたくらむ人々の姿をカークダグラスを主演でシニカルに描いてましたがもっと自分の国の歴史に向き合ってほしいなと思う次第です。そしてこれは私が更けたこともあるのでしょうが謎解きぐらいゆっくり楽しみたいですね。でも今流を目指す人々はこれが受けるんでしょうね。今はこれでもかこれでもかと思うくらい謎をたたきつける。そして大どんでん返し。それがいいんでしょうね。ラストの大伽藍での追っかけもなかなか良かったね。でも人口増加による地球の危機に立ち上がった科学者がそのからくりも含めてちょっとお粗末な気が。あとトムも更けたね。女医はかわいかったけど。その意味で言うと矢張り年のトムとはロマンスになるのではなく、昔の映画ではみんな年でもラブロマンスだったけどね。トム

がそれを望まなかったのか時代なのかＷＨＯの年相応の女優さんとのロマンスがこれまたさりげなく描かれる。でも歴史好き旅好きの私としては十分楽しめたですよ。前に見たポアロ同様じっくりゆっくり堪能できる方がいいですね。今流とは逆行するのかもしれませんが。あと余談ですが、トムたちが実はデスマスクを盗んでいた。しかし彼は記憶喪失で覚えていず、監視ビデオをを見て初めて見てしまいみんなからお前が犯人じゃと見つめられ、おたおたするシーンなんか笑ちゃったのに誰も観客は笑わない。もっと笑ってもいいんじゃないと思いました。

草々

Ｔ：楽しんで見て頂いたようで、良かったです。

あらかじめ言っておきますが、ネタバレと言っても、私も貴方の四十分も前には見ていますから、その心配はご無用です。

「(主人公を)記憶喪失にさせてフラッシュバックの乱用で恐怖を盛り上げようとしている」

今回の「インフェルノ」では、途中まで謎解きの要素を制限していますね。それは、映画のレトリックというもので、敢えて敵味方の関係を伏せておいて、徐々に記憶が戻って行くに従い、ストーリーが展開していくという手法をとっているからです。これを「乱用」することがアメリカ映画の主流というわけではありませんけど、サスペンスの定石としては、割りと古くから使われている手法だと思いますよ。

「アメリカ人はヨーロッパへの劣等意識が強すぎるのではと思います。」

これは、少し極論だと思いますよ。それに続けて、カーク・ダグラスの映画は(それが何という映画かは分かりませんけど)ヨーロッパからの監督なんでしょ？

アメリカに対する優越感(⇕劣等感)を持っているであろう監督が、そんな時代錯誤な映画を撮るのでしょうか？

自分たちの歴史に向き合うと言っても、アメリカの娯楽映画というものが、その共時性の中で、インディアン＝悪、カウボーイ＝正義という図式を構築してしまったということに無自覚ではいけないと思います。

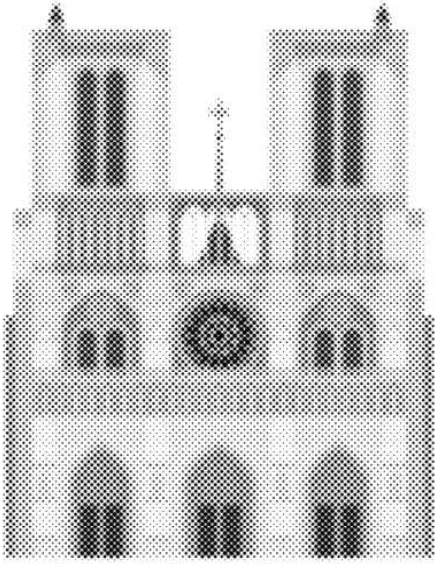
「トムも更けたね。女医はかわいかったけど。」

個人的な趣味で言わせてもらうと、女医役のフェシリティ・ジョーンズは、前作の「博士と彼女のセオリー」の方が良かった。年末の「スターウォーズ」番外編「ローグワン」にも主演してますが、今旬な女優ですね。

「トムたちが実はデスマスクを盗んでいた。～略～笑ちゃったのに誰も観客は笑わない。もっと笑ってもいいんじゃないと思いました。」

お言葉ですが、笑いの壺というか、日本人にはその手の笑いは響かないんじゃないですかね。

シリアスな展開の中での閑話休題というか、ウイットに富んだユーモアについていけない。(Sさんがアメリカナイズされているという事ですよ。)

○○七ジェームス・ボンドみたいにスタイリッシュにたち振る舞えば良いんでしょうけど、トム・ハンクスのあのしたり顔では、とても笑えない。

ともあれ、折角のチケットが無駄にならず良かった。
どうも、ありがとうございました。